The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	トランスジェンダーであるパートナーにカミングアウトされた女性たちの経験 : 日本における既存の家族像への挑戦
Author(s)	趙, 瑩瑩
Citation	年報人間科学. 2022, 43, p. 73-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86460
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈論文〉

トランスジェンダーであるパートナーにカミングアウトされた女性たちの経験――日本における既存の家族像への挑戦

趙　瑩瑩

論文要旨

本稿は、パートナーにトランスジェンダー（以下「TG」）であるとカミングアウトされた女性たちの心境、悩み、とった行動に着目し、日本において見過ごされてきた、トランスジェンダーのパートナーを持つ・持った女性が置かれた状況を明らかにすることを目的とする。そこで、トランスジェンダーにカミングアウトされた女性4人の経験について、インタビュー調査を実施した。

調査結果は以下の通りである。①彼女らの方がTG本人より多くのサポートをしているが、不平等とは認識されていない。②日本では、彼女らが抱えている悩みは社会的なものとはされず、個人的なものとして捉えているために、その悩みはさらに深刻になっている。③彼女らはTG本人を「守るべき家族」として認識し、関係内の対等な互恵性という点にはあまり重きを置いていないように見える。

以上の結果に基づき、彼女らの行動はメンタルな満足と性役割期待と関連している可能性を示した。また、TG本人が社会的に可視化されていないことにより、そのパートナーの悩みはさらに深刻になっていることも得られた知見である。最後に、彼女らは、相手を、「守るべき家族」に転換することで、既存の家族像に挑戦しているという見解に達した。このように、TG当事者および、日本（あるいはアジア）のシスジェンダーの異性愛夫婦や家族をめぐる社会環境が、TGのパートナー関係にも影響を与えている可能性があることを示唆した。

キーワード

トランスジェンダー、トランスジェンダーのパートナー、カミングアウト、ジェンダー・トランジション、近代家族

1．はじめに

本稿は、日本におけるトランスジェンダー（以下、「TG」）にカミングアウトされたシスジェンダー[1)]女性パートナーの経験を明らかにし、日本でTGのパートナーが置かれている状況を解き明かそうとするものである。

本稿では多様なケースを取り上げるため、TGを広義に捉える。つまり、「トランスベスタイト」（以下、「TV」：異性装によって精神的な充足や性的快感を得る人々）と、「トランスセクシュアル」（以下、「TS」：性別適合手術を行っている人、またはその意志のある人）、および狭義のTG（「性別適合手術」まで受けたいとは思わないが、自身の性別に違和をもつ人）を包含するものとする。

日本ではTGに関する多くの研究が行われてきた。TG本人に関しては、主に歴史（三橋 2008）、医療（中

塚ら 2004)、社会との葛藤（土肥 2015）の観点からアプローチされている。TG本人だけでなく、TGの親にも関心が向けられてきた（石井 2018)。このように、TG本人とTGにとって重要な「他者」としての親に特に関心が寄せられ、すでに一定の研究成果が上がっている。

TGのパートナーはTGと密接に関わる存在だが、日本においては見過ごされてきた。一方、欧米ではすでに着目されている。例えば、アメリカにおけるMeier et al.（2013）のFtM（Female to Male）を対象とした調査では、TGと別れず、トランジションの過程を一緒に経験している女性パートナーが多く存在し、TG本人がトランジションをしている間も、した後にも、親密で支持的なパートナーシップが結ばれているケースがある。しかし、注意すべきは、パートナーは容易にTGのトランジションを受け容れられるわけではないということである。実際には、彼女らも悩み苦しんでいる（Brown 2009; Pfeffer 2010)。

日本においてはTGのパートナーシップを研究する文献は多くないものの、自分のパートナーのことに多少触れたTGの自伝はいくつかある。例えば、MtF(Male to Female)である土肥いつき（2014）は自伝『ありのままのわたしを生きるために』の中で、結婚後に妻にカミングアウトした経験や、性別適合手術や名前の変更などをめぐる妻との衝突などについて記述し、次のような妻の言葉を載せている。「私の中には悲しみが残った。どうしても消えない悲しみ。もう私の元には返ってこない大切だった人。」（土肥 2014: 80)。このような妻の心情の吐露から、婚姻中にカミングアウトされたTGのパートナーのショックや悲しみなど、心の葛藤が伝わってくる。

しかし、パートナー自身がTGのトランジションに対してどう考えているか、どのようにそれを受け容れて現在の生活にたどり着いたかなどについては、同書にはあまり記述がない。そして、他のTGの自伝でも、パートナーに関してほとんど触れられていない。このように、日本にはTGのトランジションで苦しんでいるパートナーが確実におり、かれらは心理的、身体的な影響を受けることが分かっているが、まだ注目されていない。こうした背景から、筆者はそれに注目する必要性を強く感じている。本稿では彼女ら[2)]の立場に立ち、日本においてTGにカミングアウトされたパートナーはどのような心境であるか、どういう悩みを抱えているか、どのように現在の関係を構築しているかに着目し、それが日本でTGが置かれている状況とどう関連しているのかについて考察しいく。

第2節では先行研究を概観し、本稿の目的を明らかにする。第3節では調査の概要を報告する。第4節ではTGのパートナーのケースを4つ挙げ、TGにカミングアウトされたパートナーの経験を記述し分析する。第5節では、日本でTGのパートナーが置かれている状況を提示し、第6節で総括する。

2．先行研究で得られている知見と本稿の目的

2.1 TG のパートナーの心境の変化

FtMの場合は、レズビアンカップルで片方がトランスするケースが多く調査されている。その女性パートナーは、心理的に数多くの問題を抱えることが報告されている。一部のFtMはトランジションの過程において、パートナーに詳しい説明や交渉をすることなく何もかも独りで決めてしまうため、その女性パー

トナーは感情的な暴力やかなりの精神的負荷を経験する。そして、大切な情緒的サポートの源を失うことで、長い間悲しみに沈むことが報告されている(Theron & Collier 2013)。同様の結果はMtFの女性パートナーへの調査でも見られる(Gurvich 1991)。また、男性のTVにカミングアウトされた女性パートナーの中には、ショックや敵対心を感じ、憤慨したケースもある。そのようなネガティブな反応をした人は、ポジティブな反応をした人の3.5倍も多いと報告されている(Bullough & Weinberg 1989)。一方、FtMの場合にもMtFの場合にも、TGのトランジションがポジティブなことをもたらしたと考えるパートナーもいる。かれらは、二人の関係が強まった(Gurvich 1991; Joslin-Roher & Wheeler 2009)と感じたり、性の多様性やジェンダー規範などを再考して自分が成長した(Platt & Bolland 2018; Lev 2004)と感じている。

2.2 TGのパートナーが抱える悩み

TGにカミングアウトされた後、パートナーたちは主に、自分の性的指向や性交渉の問題、そして、元レズビアンカップルであったFtMのパートナーの場合では、レズビアンコミュニティからの疎外に悩んでいる。

性的指向については、Brown（2009）がFtMのレズビアンだった女性パートナーに対する調査を行った結果、カミングアウトされた女性の多くは、自分の性的指向について困惑し始め、再確認を余儀なくされたことが分かった。レズビアンだと自認していた女性の中には、自分の性的指向がよく分からなくなったと感じたり、クィアやバイセクシュアルに転向したり、自分がレズビアンでありながら、トランス男性も好きだと思うようになったりする者がいた。Hunt & Main（1997）の研究では、MtFの女性パートナーは、トランス女性である夫に対して性欲が湧いてこなくなったことから、自分の性的指向が異性愛であると再確認した。また、男性TVの女性パートナーは、相手の異性装により、自分の性的指向に困惑し始めた。Hunt & Main（1997）はその原因について明確な解釈はしていないが、いくつかの可能性を挙げた。例えば、彼女らは、以前女性に心が惹かれたかもしれないことや、これまで男性とのデートがあまり楽しくなかったなどの経験を語っており、Hunt & Main（1997）は、彼女らには潜在的にレズビアン的傾向があり、TGの女装によってこういう気持ちが触発されたと解釈した。

以上から、性的指向はTGのパートナーという立場にある者にとって、非常に複雑になりうることが明らかになった。

性交渉については、Pfeffer（2008）の研究によると、トランジションをしている一部のFtMは、男性ホルモンを投与するにつれ、身体への違和感が減少し、性交渉に積極的になった。これに対し、彼らのレズビアンであるパートナーには、性交渉への満足度が高まった者もいれば(Brown 2010)、女性としての以前の相手の喪失による悲しみや、トランジションをしている現在のTGを男性と見なすことを拒絶し、彼らを依然として女性と見なす者もいることが分かった(Nyamora 2004)。さらに、Brown（2010）の調査によれば、トランジションをしているFtMになぜ依然として性的に惹きつけられるのか、分からなくなる者もいた。性交渉が変化することが、MtFとそのパートナーの間にも起きる(Gurvich 1991; Hines 2006)。男性のTVの場合は、その女性パートナーは女装をした相手への性的欲望はあまりないという報告がある(Reynolds & Caron 2000)。

LGBTコミュニティとの関係性をみると、FtMの女性パートナーはコミュニティで孤立する恐れがある。異性愛カップルと見なされることで、性的マイノリティだったパートナーはコミュニティの裏切り者とみなされ、孤立し、周縁化される(Brown 2009; Joslin-Roher & Wheeler 2009; Lev 2004)。

2.3 TGのパートナーがとった行動

TGのトランジションを一緒に経験しているパートナーは、多くの身体的ケアや情緒的サポートを相手に提供し(Pfeffer 2010; Chase 2011)、トランジションをめぐる話し合いも行う。例えば、Alegria（2010）のMtFの女性パートナーを対象とする調査では、彼女らはTG本人と共にトランジションの各ステップを決定することが重要であると述べ、TGのトランジションのスピードをコントロールしていると語った。男性TVとその女性パートナーにおいても、二人で相談してトランジションに制限を設けるケースがある(Wysocki 1993)。一方で、コミュニティにおいて教育家のような役割を担当し、自分のカミングアウトされた経験を他人にシェアし、TGに関する知識を教えるパートナーもいる(Theron & Collier 2013)。

2.4 リサーチクエスチョン

ここまでに見てきた海外の先行研究ではいずれも、カミングアウトされたことによりTGのパートナーは心理的にも日常生活の上でもかなり影響されることが明瞭になった。しかし、先行研究は主に1回の調査において1つのグループだけを取り上げ、その中でもFtMとその女性パートナーに注目したものが特に多いため、ある社会におけるTGとそのパートナーの経験の全貌が見えにくい。さらに、研究対象者は欧米人が中心であるため、文化や社会構造が欧米と大きく異なる日本において、先行研究の知見が通じるかどうかは未知である。日本では、これまでTGのパートナーの経験に着目する研究はほとんどなかったため、本稿は海外の先行研究の着目点（心境、悩み、行動）を参考にして取り組むことにする。

3. 調査概要

3.1 データの収集方法

筆者は所属する大学の教員の紹介を通してTG本人と知り合い、その人の紹介で他のTGとその（元）パートナーとも知り合うようになった。そこで、2020年7月から9月まで関西在住のTG3名とTGの（元）パートナー3名の合計6名に半構造化インタビューを行った。この6名中、カップル関係、あるいは元カップル関係にあった双方にインタビューできたのは2組（4名）である。本調査は、大阪大学人間科学研究科社会系調査倫理委員会の審査の承認を得た。

コロナ禍という事情に加え、インタビュー協力者のプライバシーやテーマの敏感性をよく考慮した上で、対面ではなく、オンラインツールを用いてインタビューを行った。事前にインタビューガイドを用意し、それに基づいて質問をし、協力者には自由に答えてもらった。そして、インタビュー時、もしくはインタビュー後にLINEやメールにてさらに質問を追加し、話をより深く伺った。オンライン・インタビューは

一人当たり1時間程度であり、事前に承諾を得た上で、録画をした。

3.2 調査対象者のプロフィール[3)]

表 1. インタビュー対象者の情報（調査時）

名前と性的アイデンティティ	性的指向	（元）パートナーの性的アイデンティティ	交際開始時期	現在のパートナーとの関係	年齢	トランジション状況
A さん （MtF 本人）	バイセクシュアル	シスジェンダー女性 （a さん）	カミングアウト前	関係解除したが、同居している	49 歳	- ホルモン投与中 - 性別・名前とも戸籍変更済み - 性別適合手術済み
a さん （女性、A さんの元パートナー）	男性	MtF （A さん）	カミングアウト前	関係解除したが、同居している	44 歳	
B さん （FtM 本人）	女性	シスジェンダー女性 （b さん）	カミングアウト後	結婚している	44 歳	- ホルモン投与中 - 性別・名前とも戸籍変更済み - 性別適合手術済み
b さん （女性、B さんのパートナー）	男性	FtM （B さん）	カミングアウト後	結婚している	58 歳	
c さん （女性）	男性	男性の TV	カミングアウト前	法律上では離婚していないが、別居している	61 歳	
D さん （MtF 本人）	女性	シスジェンダー女性 （d さん）	カミングアウト前	結婚している	55 歳	- 名前変更済み - 性別適合手術済み - パートナーと婚姻関係にあるが、性別変更できないため、戸籍上は男性である

A さん（MtF 本人）と a さん（女性）のケース

aさんは異性愛者だと自認しているが、いわゆる「男らしい」男性は好きではなく、中性的な人の方が好みである。Aさんとは、Aさんが男性として社会生活を送っていたころからの交際で、法律婚はしなかったが、10年以上一緒に生活しており、いわゆる事実婚である。2000年頃から同居し始め、2015年にカミングアウトがあった。当時、Aさんはホルモン治療により非常に精神的不調になり、一方aさんもかなり精神的に病んでおり、その事実を受け容れられない状態だった。それでも、Aさんが泣いている時に横におり、ご飯でも食べたらなどの声かけをし、また病院に同伴しにいくなどのケアを2年間ぐらい続けたが、やがてAさんが女性に近づいていく変化に耐えられなくなり、2018年4月に一時的に同居を解消した。その後、aさんは別のことで精神を病み、ひとりで家にいるのが辛くなったため、同年10月からAさんの家に戻り、また同居し始めた。

B さん（FtM 本人）と b さん（女性）のケース

bさんは、Bさんと女性同士の同僚として一緒に働いていた。1999年にBさんのカミングアウトがあり、

その次の日から交際が始まった。現在二人で一緒に講座などをメインとして活動をしている。Bさんが戸籍の性別変更によって法的に男性となった後、二人は法律婚をして現在同居している。

男性TVのパートナーだったcさん（女性）のケース

cさんは、以前レストランのシェフとして働いていたが、現在は小規模の商売をしている。二人は1985年に結婚し、同年、女装が趣味であることをTG本人がカミングアウトした。その後、TG本人は女装に加えて、ホルモン投与を受け、整形もした。cさんは仕事先が別の都市になったため、1996年頃から他の都市に移住して元パートナーと別居し始めた。cさんは現在別の人（シスジェンダー男性）と一緒に暮らしている。元パートナーとは法律上は依然として婚姻関係にあり、二人は仲が良く、ときどき会う。子供はいない。

Dさん（MtF本人）とdさん（女性）のケース

Dさんは、現在TGに関する講演活動をしている。男性として生活している中で、1996年にdさんと出会い、自分の性別違和については告げないまま1997年に結婚した。同年から自分らしく生きることを求め、社会的文化的性別を「女性」に転換した。2008年からホルモン治療を受け、2010年性別適合手術を受けた。二十歳の娘がいる。

4．TGのパートナーの経験――心境、悩み、行動

4.1 カミングアウトされたときの心境

4.1.1 aさんの例：困惑・驚き・疑い

相手がシスジェンダー男性だと思っていたaさんは、食事中にいきなりMtFであるとカミングアウトされたとき、「自分が女になったらどう思うか」という話の意味が分からなかった。最初困惑し、カミングアウトとは思わなかったため、「多分別れるかな」と軽い返事をした。その後、MtFであるとはっきり認識し、驚いた。そして、それまでの二人の関係に疑問を持つようになった。

> *要するに、今までの15年は男として生きてきたわけだね。それで、今突然女って言われたことは、簡単にいうと、私を騙して15年いたのか？みたいな認知なんだけど。なので、その15年は何だった？あれは嘘だったのか？幻だったのか？みたいのも、当然思う。（aさん）*

aさんは現在になっても、交際していた対象のトランジションを受け容れておらず、これからも相手の変化に影響されると考えている。

> *相手の状態はどんどん変わっていく。こっちからしたら、もっと悪いことがこの先起こるかもしれな*

い。意外とそれはだめだとか、これは意外と我慢できるとか、自分でも分からないよ。変わってみるまでは分からない。常々影響がある。（a さん）

以上のように、カップル関係中にカミングアウトされたaさんは、最初困惑、驚き、疑いという気持ちが生じ、その後、相手のトランジションの状態が変化するにつれて悲しくなってきたことに加えて、これからも変化に影響されるという心境になった。以下では、同様に関係中にカミングアウトされたcさんの例を説明し、aさんのケースと比較する。

4.1.2 c さんの例：驚き・納得

結婚後、男性TVであるTGにカミングアウトされたcさんは、驚いたが、すぐに納得した。

驚くは驚くよね、普通にえ？とか思って、びっくりしたけど、もともとそういう方がおられるのは知っていたので、子どもの頃からテレビとかでちょっと大人向けの番組見ていたので、そういう風な趣味の方がけっこうおられると思う。実際に知識としてあったわけで、あ、そうなんだという感じ。（c さん）

cさんは以前から女装者の存在を知っており、女装が元夫の趣味であることについて、怒りや騙されたという感覚はなかった。しかし、先行研究からも分かるように、夫からTVであることをカミングアウトされると、妻は嫌悪感や裏切られた感じをもつのが一般的傾向であるのに、なぜcさんはこのようにポジティブな受け止め方ができたのだろうか。まず、cさんのジェンダー意識から見てみる。

人はそれぞれなので、どんな人でもその人なりで良いと思います。男らしさ、女らしさというものは、その時の政治や支配者の都合で作られたものだと思っています。（c さん）

つまり、cさんは「男らしさ」や「女らしさ」という伝統的なジェンダー規範には同意しない。そのため、元夫の女装が「男らしくない」とは思わず、女装趣味を尊重し理解している。また、cさんはもともと自分の仕事を持って経済的に独立しており、元夫に依存して生活していないことや、現実的に元夫と別居しており、新たな「ノーマル」なパートナーを得ていることも、彼女の精神的安定につながるという客観的理由も背景にはあるだろう。しかし、プロフィールに書いてあるように、aさんもジェンダー規範を守る人が好きだというわけではなく、経済的に自立もしているが、なぜカミングアウトされた心境はこれほど異なっているのか。その理由としては、まず、aさんの場合は交際していた対象の性別が異性に変わったのに対し、cさんの場合は元夫がTVであり、性別アイデンティ自体は男性で変わらないと思っていたことが考えられる。また、カミングアウト前の交際期間が長ければ長いほど、その事実がより受け容れ難くなる(Meier et al. 2013; Platt 2020)ということもあるだろう。結婚と同年にカミングアウトされたcさんとは異なり、aさんは10年以上交際した後にカミングアウトされたため、急に交際していた対象を女であ

ると理解せざるを得なくなっただけでなく、過去と現在の相手や二人の関係をどう捉えたらよいのかという点でも困惑しているのである。Chase（2011）の調査では、TGのトランジションが進んでいくと、元々知っていると思っていたTGのことが次第に分からなくなり、喪失感を強く感じるTGのパートナーがいる。しかし、トランジションしても内面は変わらないと一旦認識できれば、喪失感による悲しみも抑えられるとChaseは述べている（Chase 2011: 439）。こう考えると、cさんにとって元夫の女装は喪失感に繋がらないのに対し、aさんにとっては交際していた対象のトランジションの進行によって喪失感が強くなるため、受け容れ難いのだろうと考えられる。

以上、aさんとcさんのカミングアウトされたときの心境を調査し、両者に違いが生じる理由を考察した。次節では、カップル関係がどう変化したのかについて論じる。

4. 2 カップル関係から「家族」関係への転換

4.2.1 a さんの例：相手を「家族」とみなす

前述のように、aさんにはさまざまな葛藤があったが、現在はTG本人と親しい関係に落ち着いている。TG本人が（インタビュー当時）新しいトランジションをしていなかったため、aさんにしばらく新しい影響を与えていないことのほかに、aさんにとって相手が家族のような存在になったという意識があることも、その理由であろうと考えられる。

「家族」という言葉がaさんの話の中ではよく出てきた。例えば、TG本人に「家族がするレベル」のサポートを提供し、TG本人が精神的に落ち込んでいる時に「家族として」一緒にカウンセリングに行った。また、aさんはカミングアウトされた後に多くの悩みを抱えるようになり（これについて次節で詳しく論じる）、悩みを聞く会に参加した際に、他の人が家族に対して抱える気持ちに共感した。

> *家族が障がいって言うとあかんけど、人から見て、え？って思われるような見かけとか、行動するわけでしょう？その時に、特に日本では人は人を見ると同時に、家族を見るわけだね。ちょっとこれどういうこと？これ何なん？みたいのを私に聞かれるように感じてるわけだよ。DV サバイバーの人とかも、やっぱ家族でかなりしんどい関係で、時として暴力とかあって、やっぱ別れましたとか、別れてなくてこうなりましたとか。それは私の経験と少し被ってるね。私もいつ別れるか、みたいなのは常々考えているので、家族といつ別れるかみたいな話をしている時は、一部の悩みは、私すごい分かるわけだ。（a さん）*

一般的には、夫婦やカップルでは、互恵性[4)]が存在し、互いの報酬とコストが関係満足度に影響するとされる。しかし、aさんは相手のトランジションにより、かなりネガティブに影響されて関係満足度が下がったようだが、自分の時間やサポートを関係内に投入し、すっぱり関係解消できないと考えている。つまりaさんにとっては、Aさんとの関係は負担ではあるが、Aさんへの責任を果たしたいという気持ちが強い。こういう関係は、（aさんがそのように自覚しているか否かにかかわらず）、互恵的、かつ性関係も含むパ

ートナー関係ではなく、たとえば母親が子にほとんど一方的に責任を感じ世話をする「家族」のような関係に感じられる。cさん、Dさんも、aさんと同様なわけではないが、やはり互恵的なパートナー関係と言うよりも、「家族」として協力し合う関係になっているように思われる。

4.2.2 c さん、D さんのパートナーの例：性交渉しなくなった

第2節で述べたように、性交渉の変化は欧米のケースの中でよく出てきたキーワードである。つまり、欧米においては性交渉の変化はパートナーの気持ちや二人の関係に大きく影響する。一方で、日本のケースには異なる現象が見られる。

cさんは、TVである自分の相手がホルモン投与を受けるにつれ、性交渉は徐々にできなくなったが、性交渉をしなくても別のことで生活を楽しんでいると語った。また、MtFであるDさんも、昔男性として女性と性行為をしっかりするしかないと思っていたが、子どもを授かった後はパートナーとセックスレスになったと語った。

> *一応現状はセックスレスだ。そういう形でもありと私はそう思ってる。dさんがその辺どのように思っているかは分からないけどね。聞けば不満とか出てくるかもしれないが、そういう不満が原因で別れようとか、そういう話は出てない。（Dさん）*

以上から、日本では、今回の調査対象者に限ってのことではあるが、トランジションによって性交渉が無くなったというのは、関係の変化にほかならないが、しかし、カップル関係を解消する理由にはならないことが明らかになった。そして、性交渉の変化に悩んでいるTGのパートナーも、今回の調査にはいなかった。つまり、TGのパートナーシップにおいて性交渉が重要視されている欧米の状況とは異なり、日本の場合にはTGとそのパートナーの関係はより「家族」関係に近いものであることが示唆される。なお、日本では（あるいはアジアでは）夫婦や親密な関係の中で性交渉は後景に退きがちな文化的傾向があるため、元からそれほど重要視されていないことの影響がある可能性もある。ただ、性交渉に関する質問は非常にプライバシーに関わることであり、１、２回のインタビューで本当のことが語られたかどうかには疑問が残る。

他方、彼女らは性交渉に重きを置いていないように思われる一方で、他の悩みを確実に持っている。次節でその悩みについて論じる。

4.3 社会的状況に関する悩み

4.3.1 a さんの例：相談相手の不在、社会から隠れている存在

aさんは、相談相手の不在に苦しんでおり、誰ともまったく相談できない状態に陥っている。その理由は３つある。一つ目は、自分と同じようなことを経験し、自分の悩みをよく理解できる相談相手が見つからないからである。二つ目は、aさんは自分が長い間隠れた存在だと考えているからである。

大体の人が、A さんは明らかに変わっているから、悩んだり、大変やろうなみたいな想像するね。私に関しては、隠れた存在なので、私に対して、大変でしょう、悩んでいるでしょうって言ってくれる人はまずほとんどいない。それも結構しんどい感じだよ。(a さん)

三つ目の理由は、a さんは自分の経験は他人が簡単に理解できることではなく、想像がつかないことだと思うことにある。

DV で離婚したとか簡単に人が分かることやったら、それだけで分かるやつでいいじゃないか。でも、私のやつは、パートナーが男性から女性になると言い出して、普通の人にはちょっと想像つかない感じの悩みなんだね。(a さん)

a さんの悩みは、もちろんカミングアウトされたことに起因するものだが、社会における TG についての認識不足によってさらに深刻になっていると言っても過言ではないだろう。

Alegria（2010）の調査では、カップル関係中にカミングアウトされた後、公共の場で MtF のパートナーであると表明する女性パートナーもいれば、活動家になって TG に関する知識を広めることで、世間の TG への偏見や差別を解消する努力をしている女性パートナーもいる。ここに、欧米と日本の社会環境の差異が見られる。つまり、欧米も日本も MtF への偏見や差別が存在しているものの、アメリカにおける MtF とその女性パートナーは可視化されており、社会に向けて積極的に声を上げている。一方で、日本の a さんは長い間一人で苦しんでおり、交際していた対象が MtF であることを他人に開示できずにいる。その大きな理由は、「MtF トランス女性」が社会的にその存在を認められていない状況にあると言える。

4.3.2 b さんの例：他人の詮索、相手の介護への心配

b さんは TG 本人が性別適合手術をまだしていないときに、他人に性別や2人の関係を詮索され、一時的に世間の目線から逃げようとした経験がある。

最初の頃、電車に乗ったとき、パッと前に座ってる人がコソコソと「あの二人（B さんと b さん）って女同士だと思う？男と女だと思う？」って聞こえて、その言われた人は初めは何も思ってなかったのに、その声でパッと私たちを見て、「男の子なんちゃう？」ってその隣の人に言うと、「いや、でもよく見ると、あの人胸膨らんでる感じしない？」とか、そういうことがある。何なん？ってすごい思って、ただ電車に乗って私たちの前に座ってたのに、なんでそんなに言われるか。(b さん)

このように世間に詮索されることは、TG の性別適合手術の完了や戸籍上の性別変更などに伴ってなくなった。つまり、b さんと相手は「ノーマル」なヘテロカップルと見なされるようになった。これは、社

会によるTGやTGカップルの受容度が上がったというよりは、むしろ異性愛の規範から逸脱していないTGカップルのみ、社会は許容しているということであろう。

また、他人に詮索されたことのほかに、TGの介護問題もbさんの悩みである。bさんはTG本人より10歳以上年上であるため、自分が先立った場合、TGの介護はどうなるかを心配している。つまり、介護業界においてTGへの理解はまだ十分ではないため、TG本人にとっては心配事であるのみならず、そのパートナーにとっても悩みの種になりうる。

以上より、日本におけるTGのパートナーは、TGやTGカップルへの理解やサポートが未だ不十分である社会的状況のために悩みを抱えるようになったり、悩みが深刻になったりしていることが明らかになった。次節では、このような社会的状況に直面しているTGのパートナーたちは、どういう行動をとったかについて記述する。

4.4 世間の偏見から相手を守る

4.4.1 b さんの例：情報の収集、術後ケアの提供等

bさんはBさんと交際して以来、Bさんのやりたいことを否定せず、応援している。相手が医者の言葉に傷つけられないように、最善を尽くして相手のために情報を調べることもした。また、病院への付き添いや、術後のアフターケアなどに手を尽くした。

ここで注目すべきなのは、bさんは自分がやっていたことが支援やサポートであるとは思っていないことである。Pfeffer（2010）によると、カミングアウトされた女性パートナーたちは、相手への情緒的サポートや術後ケアなどを提供することにより疲れを感じ、自分の時間を多く失ったと考える。しかし、bさんはそう思わない。

> *トランスの人と恋愛すると、必ずそうじゃない人が支えるみたいに周りが思いがちやけど、私とBさんはただの恋愛やから、お互いやっぱり、Bさんも私がいるのも嬉しいやろうし、私もやっぱBさんがいるから私がおれるね、みたいなのは、いろんな恋愛と変わらないかなって思って。トランスのパートナーの方がいつも支える人、みたいなのは違うんやな。（bさん）*

bさんは相手に対して行ったことはさせられてしているのではなく、自分の自由意志による選択であることを主張している。Pfeffer（2010）は、相手がトランジションする前に交際し始めた女性、およびTGと一緒に相手のホルモン投与や手術を経験してきた女性は、自分の意志でそうしていることをより強調することを指摘している。これは文化やトランスをめぐる社会状況の違いにもかかわらず、bさんの例にも当て嵌まることである。bさんは身体のトランジションする前のTG本人と交際し始め、トランジションは相手だけの問題ではなく、自分がそれをサポートし守るべきであるという責任感を感じている。

4.4.2 D さんのパートナーの例：サポートを提供し、相手を守る

Dさんのパートナーも、Dさんの女性性が周囲に傷つけられないように、さまざまな配慮を払っている。そして、自分たち家族が親子3人に見えないことに対して、Dさんのパートナーは面白いというポジティブな態度で考えている。

たまたま店員さんが、え？この人は…と言ったときに、dさんがこの人は女性ですよ、とすぐ抗議してくれるということはありました。（中略）私たちはもう完全に親子３人で出かけると思い込んでるんですけど、よく考えると、親子３人に見えないわけですよ。「こういう状況、面白いよね」とお互いに共有してる。（Dさん）

こうした場面から、カミングアウトされてから相手を理解し、相手と協力し、相手を性差別社会から守っているTGのパートナーたちの姿が浮かび上がってくる。

5. TGとその女性パートナーが置かれている状況をめぐる考察

以上、TGの女性パートナーのカミングアウトされたときの心境、悩み、とった行動に着目し、日本におけるTGのパートナーの経験を明らかにしてきた。得られた知見は、以下の3点にまとめられる。

一つ目は、女性パートナーからTG本人に対する方がTG本人からパートナーにするよりも、多くのサポートをしているが、不平等とは認識されていないということだ。これは女性パートナーによれば、相手から「メンタルな満足[5)]」を得ているため、対等な相互行為だと受け止められているようだが、しかしこれはパートナーが、社会が求める女性に対するジェンダー役割期待、例えば「優しい」、「人をたてる」、「人の世話をする者」に適応している可能性もある。こういう社会的に期待される役割に応じることにより、自分の気持ちを無自覚的に抑圧したりする可能性もあるため、今後TGのパートナーの心境にさらに考察する必要がある。

二つ目は、日本ではTGのパートナーたちが抱えている悩みは、社会的なものとはされず、個人的なものとして捉えているために、彼女らの悩みはさらに深刻になっているということだ。日本のTGをめぐる社会構造を見ると、その原因がさらに浮かび上がる。同性婚制度が実現していない状況と性別認定手続きの煩雑さが相まって、常にTGとそのパートナーをジレンマに陥らせている[6)]。また、三橋（2008）の指摘のとおり、欧米のような性的マイノリティの存在を否定する宗教規範がない日本には、性別越境は「文化」として受け止められ、TGであることの主張は、欧米のTGのように自分自身の権利を求める大きな社会運動にはなっておらず、世間の認識に有力な変化を与えられないでいる。このように、日本社会ではTGが不可視化されているため、そのパートナーも周辺化され、彼女らの苦境は結局個人的なことに帰結されてしまうのである。また、日本（あるいはアジア）の夫婦関係内の性的交渉がもとより重視されてない状況と相まって、TGのパートナーの悩みは、性交渉という個人状況に関する悩みより、社会状況に関する悩みをより多く抱えている。

三つ目は、パートナーはTG本人を「守るべき家族」として認識し、関係内の対等な互恵性という点にはあまり重きを置いていないように見えることだ。欧米の先行研究においても、TGのトランジションに伴い、性交渉のあり方の変化とともに、親密性のあり方にも変化が生じた点は指摘されている(Hines 2006)。しかし、日本（あるいはアジア）では異性愛夫婦でも、性愛の絆で結ばれているというより、「家族」としての関係が重視されるという文化上の特徴から考えると、日本（おそらくはアジアでも）においてこのようなTGのパートナーシップが形成されやすいと考える。

ここで、「近代家族」の概念を取り上げたい。日本において高度経済成長を経て大衆化した近代家族は、男女二人が親密性や情緒性という家族感情に支えられ、子どもを中心とする核家族をなすという特徴がある（落合 1989）。本稿で取り上げた、交際中に相手にカミングアウトされた三人の女性は、TGのトランジションが一つのきっかけになり、こういう想定していた家族の形態と目標に沿わない生き方を選んでいる。つまり、男女の性的結合を前提とせず、ケアや情緒的サポートを絆とする、一夫一婦的ではない新たな形の「家族」あるいは「家族的なつながり」を生み出した。また、もう一人の女性は相手のトランジションにより、異性愛カップルとみなされ、異性愛の特権の一つとしての婚姻制度を利用したケースであるから、近代家族に近づいていると思われがちだが、次世代再生産を目標とせず、互いの情緒的サポートや平等性を重視するという意味で挑戦的に近代家族の本質を変えているのではないだろうか。総じて言えば、これらの人々は、単にシスジェンダー女性とそのTGである相手、というだけではない。本人たちは意識していないかもしれないが、既存の家族像への挑戦をしているのである。

6．おわりに

本稿では、まず、TGの女性パートナーらの行動は「メンタルな満足」の獲得や性役割期待と関連している可能性を示した。

また、TGが不可視化されているため、そのパートナーの悩みはさらに深刻になっていることも得られた知見である。

最後に、カミングアウトされた日本のTGのパートナーは、相手との関係を、「守るべき家族」に転換することで、既存の家族像に挑戦しているという見解を提示した。そしてそれは、日本におけるTG本人が社会的に可視化されていないことおよびシスジェンダーの異性愛夫婦、いわゆる「普通」の夫婦であっても、性的絆は必ずしも重視されておらず、妻が夫の身体的・情緒的世話をすることが夫婦関係の核となっている場合も多い、ということと関連しているのではないかということを示唆した。つまり、そうしたTG当事者および、日本の夫婦や家族をめぐる社会環境が、TGのパートナー関係にも影響を及ぼしている可能性がある。

本稿は長い間見過ごされてきたTGのパートナーの経験に注目し、彼女らの声に耳を傾け、日本社会の性差別問題を探ることで、現代の女性像と家族のあり方についての理解に寄与することを狙うものである。

文献

[1] Alegria, C.A, 2010, “Relationship challenges and relationship maintenance activities following disclosure of transsexualism”, *Journal of Psychiatric and Mental Health Nursing*, 17(10), 909-916.

[2] Brown, N.R., 2009, “‘I'm in Transition Too’: Sexual Identity Renegotiation in Sexual-Minority Women’s Relationships with Transsexual Men”, *International Journal of Sexual Health*, 21(1), 61-77.

[3] ———, 2010, “The sexual relationships of sexual-minority women partnered with trans men: A qualitative study”, *Archives of Sexual Behavior, 39*(2), 561-572.

[4] Bullough, V.L., Weinberg, T.S., 1989, “Women married to transvestites: Problems and adjustments”, *Journal of Psychology & Human Sexuality*, 1(2), 83-104.

[5] Chase, L.M., 2011, “Wives' tales: The experience of trans partners”, *Journal of Gay & Lesbian Social Services*, 23(4), 429-451.

[6] 土肥いつき , 2014,『「ありのままのわたしを生きる」ために』日本児童教育振興財団内日本性教育協会 .

[7] ———, 2015,「トランスジェンダー生徒の学校経験」『教育社会学研究』97: 47-66.

[8] Gouldner, A. ,1960, “The norm of reciprocity: A preliminary statement”, *American Sociological Review* , 25, 161-178.

[9] Gurvich, S.E., 1991, *The transsexual husband: The wife’s experience*, Doctoral dissertation, Texas Woman's University.

[10] Hines, S., 2006, “Intimate transitions: Transgender practices of partnering and parenting”, *Sociology*, 40(2), 353-371.

[11] Hunt, S., Main, T.L., 1997, “Sexual orientation confusion among spouses of transvestites and transsexuals following disclosure of spouse’s gender dysphoria”, *Journal of Psychology and Human Sexuality*, 9(2), 39–51.

[12] 石井由香理 , 2018,『トランスジェンダーと現代社会 : 多様化する性とあいまいな自己像をもつ人たちの生活世界』Akashi Shoten.

[13] Joslin-Roher, E., Wheeler, D.P., 2009, “Partners in transition: The transition experience of lesbian, bisexual, and queer identified partners of transgendermen”, *Journal of Gay & Lesbian Social Services*, 21(1), 30-48.

[14] Klein, T.,2008,“Querying Medical and Legal Discourses of Queer Sexes and Genders in South Africa”,*Anthropology Matters*,10 (2): 1–17.

[15] Lev, A.I., 2004, *Transgender emergence: Therapeutic guidelines for working with gender-variant people and their families*, Routledge.

[16] Meier, S.C., Sharp, C., Michonski, J., Babcock, J.C., Fitzgerald, K., 2013, “Romantic relationships of female-to-male trans men: A descriptive study”, *International Journal of Transgenderism*,14(2), 75-85.

[17] 三橋順子 , 2008,『女装と日本人』講談社現代新書.

[18] 中塚幹也 , 江見弥生 , 2004,「思春期の性同一性障害症例の社会的 , 精神的 , 身体的問題点と医学的介入の可能性についての検討」『母性衛生 = Japanese Lournal of Maternal Health』, 45(2), 278-284.

[19] Nyamora, C.M., 2004, *Femme lesbian identity development and the impact of partnering with female-to-male transsexuals*. Alliant International University, San Francisco Bay.

[20] 落合恵美子 ,1989,『近代家族とフェミニズム』勁草書房 .

[21] Pfeffer, C.A., 2008, “Bodies in relation—Bodies in transition: Lesbian partners of trans men and body image”, *Journal of Lesbian Studies*, 12(4), 325-345.

[22] ———, 2010, “‘Women's work’? Women partners of transgender men doing housework and emotion work”, *Journal of Marriage and Family*, 72(1), 165-183.

[23] Platt, L.F., Bolland, K.S., 2018, “Relationship partners of transgender individuals: A qualitative exploration”, *Journal of Social and Personal Relationships*, 35(9), 1251-1272.

[24] Platt, L.F., 2020, “An exploratory study of predictors of relationship commitment for cisgender female partners of transgender individuals”, *Family process*, 59(1), 173-190.

[25] Reynolds, A.L., Caron, S.L., 2000, “How intimate relationships are impacted when heterosexual men crossdress”, *Journal of Psychology & Human Sexuality*, 12(3), 63-77.

[26] Theron, L., Collier, K.L., 2013, “Experiences of female partners of masculine-identifying trans persons”, *Culture, health &sexuality*, 15(sup1), 62-75.

[27] 筒井淳也 ,2008,『親密性の社会学――縮小する家族のゆくえ』世界思想社 .

[28] Wysocki, D.K., 1993, “Construction of Masculinity: A Look into the Lives of Heterosexual Male Transvestites”, *Feminism & Psychology*, 3(3), 374-380.

注

1）シスジェンダーとは、出生時の判定に基づいて社会によって割り当てられた性別と性自認が一致し、それに従って生きる人のことをさす（Klein 2008）。

2）インタビューした TG のパートナーたちは全員シスジェンダー女性である。

3）TG 本人は、A、B の大文字で、そのパートナーは、a、b の小文字で表す。同じアルファベットは、カップルであることを示す。

4）互恵性 (reciprocity) とは、他者から受け取った恩恵や損害に対して、価値が同等のもの、あるいは類似しているか形式が同一であるもので返すことである (Gouldner1960)。

5）人は偶然に左右されながら、また効率の悪い営みであることをしりながらも、親密な関係にコミットしている。なぜなら、親密な関係は、「メンタルな満足」、いわゆる「親密財」を効率的にもたらしているからだ（筒井 2008）。

6）NHK 福祉情報サイト・ハートネット「パートナーシップ制度『“ トランスジェンダー ” の場合』」（2021 年 10 月 1 日取得 , https://www.nhk.or.jp/heart-net/article/44/）

The Experience of Women Whose Partners Have Come Out as Transgender: A Challenge to the Existing Family Image in Japan

ZHAO YINGYING

Abstract:

This article focuses on women in Japan whose partners have come out as transgender. The purpose is to describe the situation of these women, which has long been overlooked in Japanese society, by revealing their feelings, including their worries, and how they maintain their relationships. Toward this end, interviews were conducted with four cisgender women who had transgender partners, either at the time of the study or previously. The following results were obtained. First, the women provide more support than their transgender partners, but they do not perceive this as inequality. Second, their problems are considered personal rather than social in Japan, which exacerbates their worries. Third, they see their transgender partners as "family members to protect" and do not seem to place much emphasis on reciprocity within the relationship. Based on these findings, the women's behavior appears to be associated with mental satisfaction and gender role expectations. Moreover, due to the invisibility of transgender people in Japanese society, their partners are also marginalized and their troubles have become more serious. The women in this study came to the view that they are challenging the existing family image by transforming their relationship with their partner as a "family member to protect." This suggests that the social environment surrounding the couples and families made up of cisgender heterosexual people in Japan (or, more broadly, in Asia) may also affect the partnerships of transgender people.

Key Words : transgender, women with transgender partners, coming out, gender transition, modern family